



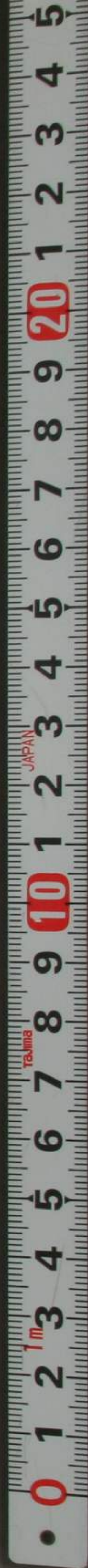
開卷驚奇俠客傳

第五集

金

四

~13
3157
24



3157
24

中銀

金長

此回の前
の物語
の終り
の意
と
し
て
読
む

開卷驚奇俠客傳第五集卷之四

浪華 蒜園主人編次

第廿七回

遠江の洋中奸黨良善と溺と
難波の港口小老僧未来と示と

ころ 時候の四月の初旬霞靄く海の面遙小船と漕出と小當下順風徐々小吹々々々
楫子帆と揚走り々々波と凌ぐ音潔くして船の去るる箭の像々々々倒
疊席小坐するが如く島々浦々の送り往々形容繪小畫まわ々々景色々々小衆
人兵と推して險不憂苦も忘るるや或ハ又各々の話譚々々々伊
良古が崎と後小々新居の澳も快過て遠江國印前の澳まを来ぬる頃々々
陽西小光竭て黄昏迹々々々々英虞氏ハ海上と望み遣々々々暮果れ向々々々
準備々々酒肴と拿出て稲城母子小勸めると々々在下門と初めて伴當楫子

俠客傳第五集卷四

蒜園主人編次

の者まで各酒を呑みもろろ。食歡喜て順風を祝し。下戸の序次も夕飯を喰べ
 るどす。間小英虞氏の一聲叫びて後さま小仰及々。涎沫を吐くも夥しく。現心
 もろ允容るま。大家愕然と駭き喋ぎ介抱せんと起んとす。小齊一足痠腰麻痺
 て毫も争くも慥に這抑甚麼といふ處小一人倒れ。二人倒れて一箇も涎沫を
 吐ぬへる。开中小在下。平素より酒を嗜む。多く吃さう。故小や要時ハ那
 這と助起す。小垣衣の信夫も楯取庶吉も亦是幼年なる故小。酷くも吃故
 らるべし。共侶小立喋ぎて着病せんと做るま。竟小同く痠痺を感
 中もぞ臥さう。任放心地ハ甚くも遠ら。只手脚の運動も物言障の慥ら而
 已るま。尚も現居さう。小。控柄把さる船長一人嚮さう。酒を吃さう。人々の
 倒れ果さうと着て暗跡と思し。衝立上りて脚を揚。舟を踏々と履鳴せ
 ば底より簀板を撥及して。現さ出る癡者四五個。先這那の衆人の倒れさう。

光景と着て齊一呵々さう。笑ひ俺老主公の謀畧如く。這奴們の一
 名も残らぬ。蒙汗薬を呑ま。死人小等し。的と做ぬ。一と端さう。結
 果けて快海中へ投棄す。といふを食一吞へて道さう。如此さう。入の殺せん。小
 宿鳥と刺さう。容易さ。然為さ。船の血小塗さ。港口へ着候。面
 倒る。刀劍衣類什麼小。金錢小成。き東西と奪て。這儘水葬も好ま。小
 從令河童と欺く程の水練あり。小。這様さ。活復さ。べきさ。と商量
 して。先英虞氏の両刀を奪畧て衣服まで剥も。疲さ。骸と二名して
 拾起して。柩の上さ。千尋の海と望ま。矢と投入さ。小。憐れ。槍刀
 弓馬の技。小。讓らぬ。壯士も。蒙汗薬を吃さ。故小。怎の術も。押投られ
 て。當下西小。落去。汝と共小。流。是て。弥陀の在。御國小。去。さ。原
 末木造親政。开子の仇讐を報ゆんと。這船長小。分付て。箱城母女と英虞

氏まふ失んんと巧うふこそ悪きも憎し。這奴們が百會微塵も斫破て恩師の妻子を救はん。心意の弥猛小急進も。眼を睜るの物も不言也。況る手足の掙るの甚麼とも為術。看る十餘名の伴當と海小投没らまて心地怎むらうと思ひる。宜く查るる。その中小庶吉只。枕も手足の動けふや。這光景小堪へ難て。兵兵く脚と踏直。健氣も小腰刀を辛うじて抜持つ。前小立る一箇の賊。肩の邊と鋒外。斬着。那奴大小怒と起し。這小豎子奴怎とす。と刃と丁と打落。食一其小立鬼。這奴酒と吃さる。飲殆う兒と喧響つ。手把り足捕と拽張て。亦復海小投んとせし。中小一個が禁めていふ。や。要時等と。這治郎の半紀より胆の太やうあふ。生色皎く愛敬あり。俺老主公の日屬より。男色を好む。さるべき龍陽と求め。あんど未おん心小慍ひ者あり。這小豎子と拿去て。倘御意小慍ひ。俺們功と

賞せらして褒美の望次第あらん。後今おん意小慍を。畢竟一個の小豎子も。此が登時殺すとも活せとも。料理するの許すありし。這詔如何と悄語。大家齊一諾。中小浅癩負る一個の賊。枕殺えんと怒り。と食一勸解て納得させ。帆綱と把て度吉口と。轉々と網めて。船底へ撞と押入る。諸开次。老樹の刀自。又垣衣する。べし。這術妻こそ今番の。今即君の敵手。這奴も拿去て。大主公も。奈何あらん。といふと一個が諾を。不白の女の拿去去とも。今即君小後へくも。仇敵を撃ん。強情的と所由。過失。ともいふ。尙事。あは。脱落。小あらんも料難。然し。可惜美婦人。只打稠て海龍王の。后小する。可。と。人。然。と。回。同。次。と。投。音。所。折。断心地。這比。在。最。時。疊。帆。下。不。轉。落。快。賊。小。看。夢。如。這。光。景。と。看。記。臆。ひ。



の曹

遠江海中親政
 復怨恨
 とくはあはまのあまのこを
 とくはあはまのあまのこを



の曹

の曹

の曹

の曹

然間小舟前の方より高尾舸一艘漕出。這船と投て寄来る。一瞬く間小
漕迹つきて三反許小成る頃晝より明く押照る。夕月の光小附て。但見舸
前坐せらる人在。その打扮は亮然小所見。細鎖の甲手脇盾小。腹巻も
あつちりりべし。息き夾衣を被せり。曾小金具見出し出て。月小光映と競
ひり。身材六尺有餘小。足えと色赤く肉肥き小。月額長く生伸たつが黒
漆の太刀鷗尻小。佩倣し。掌小一條の棒と把る。赤檀木あわらんちんちん
繫く打らぶ。丈八尺許あると最も輕け小。掉廻して其舸等と聲と掛け。寄よ
寄よと指揮せらる。光景名告で著き海賊の大將軍との所見。うらうら。艦の方
小。部下と見えける。一個の漢子が半弓小。片午箭袂。眼と配せ。楯取向個
ハ汗と流して喘々觸と推むと小。應て艦方へ寄んとし。威風烈々き形勢と
見て。奸賊們的着急忙噪ぎ。手尔々觸櫂と取るあま。猛可小帆と捲道と

んと力を勤せて曳揚る。小在下が不造化小ハ。一遍毒手と脱せり。も再這
眺小張上る。帆小撥きて敢無くも。遥小那方へ拽飛さきて。真倒小海底小。お
と思ひ。尔後ハ快くも死入る。小ぞあらん。毫も覺えをど。做ふ。已あて人の
喚聲。此勿然耳小。入々ま。不圖眼と開きて。是と看る。小。年老く。瘦腕ひこ
る。一箇の沙門が耳小。附る。こ。喃々と呼ぶ。と有る。原来甦る。とと思ひ。心
を静めて。四下を看る。小。乗合舸とあぢ。こ。貴賤老若凡名。取圍と在け
る。小。垣衣も甦生して。沾る。衣の尽る。開旁小。卧て。那沙門ハ在下甦
Pとを見て。大小怡悦び。如何心下ハ。慥小。做。飲。且。這菜と吃。了。と。甚麼。小。香
あらん。丸劑と一粒投出て。給。下。身と受載きて。即て服。一。さる。小。香
氣。馥郁と。脚。下。小。通。P。と。汐と吐。の。懸。く。心地。忽ち。清亮小。成。ぬ。在。下。や。く
起。上。先。那。沙。門。小。稽。首。と。再。生。の。鴻。恩。と。謝。一。衆。人。も。耐。勞。ひ。く。有。一。次。第。と

尋ふ。那沙門のそれらるる是ハ伊豆の下田より。難波津小去く乗合船あり。食
 道ハ所要あり。土佐國へ去んとて。這船小使船。昨夜遠江洋過。不順風
 あり。あまきりるる。波と等と。澳中小碇を下し。在る。但見。人の死骸と。あ
 かり。流し。寓る。東西ある。蓬庫より照し。火小。透し。看す。最弱き。男女那
 這二箇る。弱て。向む。所着て。汝。脱ても。あら。貧道。酷く。可憐小
 あり。先船頭。小情由。告。船中の。衆人。も。人命。得難き。筈と。語急。説
 示し。い。助る。的。這。若。男女。を。助け。験。い。不。齊。一。同心。せ。れて。力。と。勤
 せて。女の。死骸。先。曳。揚。て。着。て。あ。む。枕。中。脱。小。温。氣。あり。原。来。男。も。仔細。の。う
 じ。亦。復。和。主。と。拽。揚。る。小。同。く。温。氣。あり。衆。人。等。て。汝。と。吐。し。あ。芭。菰。を
 火。小。焼。て。身。と。暖。め。る。と。す。り。小。何。も。幽。小。呼。吸。出。さ。う。と。そ。の。獲。生。小。疑。う。と。て。
 枕。撓。く。勒。る。程。小。漸。々。氣。息。も。確。乎。小。做。ぬ。と。い。と。彼。此。耳。邊。小。附。て。呼。生

果。一。く。倭。魁。生。ら。る。る。小。天。幸。と。い。ふ。宿。世。愛。と。人。々。の。抑
 和。主。ハ。何。處。の。人。お。て。什。麼。も。故。小。女。と。共。小。海。小。溺。れ。せ。ら。る。衆。合。の。衆。客。ハ。只
 是。情。死。る。と。い。ふ。奈。何。と。向。ふ。小。在。下。ハ。漸。愧。小。堪。絲。と。然。氣。も。紛。り。て。
 否。這。女。中。ハ。在。下。と。縁。ある。人。お。ひ。及。唯。同。船。の。伴。侶。今。日。も。鳥。羽。湊。り。鎌。倉
 小。去。んと。發。船。せ。り。小。料。ら。る。海。賊。の。奸。媒。小。的。王。蒙。汗。菜。と。吃。せ。る。身。體。自。由
 を。得。り。と。開。儘。海。小。投。入。ら。る。以後。の。事。ハ。毫。も。記。さ。ず。枕。十。餘。名。の。衆。合
 あり。且。這。女。中。の。母。も。あり。伴。當。も。あり。擔。物。も。あり。其。們。の。人。ハ。無。り。欵。と。向。ハ
 老。僧。慰。め。て。亦。亦。意。外。の。災。厄。あり。四。月。初。旬。の。夕。月。ハ。已。小。入。り。後。る。海。上
 ハ。最。闊。く。て。さ。る。人。々。の。看。も。苗。ど。子。ニ。追。風。小。做。て。汝。小。宜。ひ。さ。る。と。い。ふ。
 碇。と。手。繰。真。帆。を。揚。入。几。十。里。来。小。さ。る。今。ハ。悔。と。も。賢。び。難。う。案。小。和。主。們
 二。名。の。人。ハ。神。佛。の。眞。助。あり。て。運。命。強。き。人。と。い。ふ。と。ま。る。枉。難。の。中。を。脱。して。

這船小の流を寓をろめ甚麼も停も愈前世うの定業をると如何せん
 きりとして酷く莫歎うをそ。那溺没せう人々も運あり又信固様小命
 活らるも有ぬべしと慰めらるても。垣衣の母のう又庶士らう人々は何成
 久んと唯難つ右小左小去る末もあ浪の回らぬ人と做るる飲と思葉折
 只管小泣沉てあうるを在下酷く勵して。信ととも今更不這首を歎く
 要るきやへ泊べき所去泊さう。在下も共侶小你の所縁と訪ぬへ心強く思
 ひる。信とても神佛の眞塔竟不錯誤む。悪人の手小失をさるるありあ
 べうら。とつ間小衆合の甲乙が異き衣を那這脱て假不在下們二名小着
 濡る衣服と絞つ。火小干みとする程小夜の黎明と明去て。紀伊國熊野
 の澳小来小多。登時船頭在下小いさや。鳥羽より出船しあひしるる。又那
 港へ回らまも。想ひあへるる。去向と急ぐ快船さる。你們二位の所

めて。那里へ漕回し難。又這磯頭小寄んも。巖石峨々。荒磯るる。
 开も亦協ひがこ。まま難波へ着んま。辛抱してその上。左も右も。人
 のふ是亦推辞べくもあ。心得うと回答と。盤費の腰小纏る。伏
 十四五両齋ア。五両許と把出。先船頭小與へ。幫助らま。謝禮を
 演ま。垣衣も亦小六分ち。盤纏と失らるる。是も亦五両を支ち。同
 く船頭小與へ。何言の雜費小充る。辞まらる。歡喜受て。款待初小彌増
 つ。垣衣と親切小勲。粥と煮て進めらる。信而又老僧も。五両づ。十両と呈
 して。助命の恩謝と迷る。那僧此もこれを受て。その又益る。謝物。旅ハ
 盤纏の影うらま。心細きもの。苗めて費小充ら。下。人を救る。出家
 の道。報と受ん。與へ。非む。と腹立。げ小窘めて。一切眷願もせ。し
 う。在下。又のひらる。仰さる。ひくども。俺身。差當。と。做べき。忠孝

の勤あつ。徳を真腹小華らむと。只一事の做さるべき。不忠不孝の奴と
 ろうて。黄泉小死心恨を遺まへべき。幸やと聖僧の慈悲小命助られ。糸らせ
 ろう。思へ今。這三熊野の澳あり。尚深う。只此少の報も得せ。這儘後し
 く別まらば。怎の目小。在下。心の安堵。胸あへん。屈て許容。あやと。數とて止ま
 り。那僧。僅小。ち點頭。きま。で小云。萍。這船中の衆客も。同く
 劬勞。せら。れ。酒。小。ま。れ。飯。小。ま。れ。調。と。饗。食。せ。ら。ら。も。宜。ら。ん。馬。心。僧。の。雲。水。小
 伴。ひ。く。且。暮。の。露。霜。小。起。卧。艱。難。と。積。て。功。徳。と。す。行。脚。修。行。の。者。さ。ら。ば。
 財。あ。り。て。却。小。佛。意。小。背。く。處。あり。され。決。と。受。が。し。と。い。ふ。を。在。下。推。回。し
 て。衆。客。小。東。西。泰。ら。せ。ん。と。縁。と。心。小。存。た。う。そ。の。難。波。あ。て。留。別。の。時。小。こ。そ
 系。ら。せ。ら。這。の。犹。収。め。る。か。と。説。ども。更。小。取。取。後。為。べき。や。と。い。ふ。と。俵。小
 難。波。へ。泊。ば。衆。客。小。東。西。饗。ひ。く。謝。せ。ん。と。思。ひ。く。止。ま。ら。う。既。や。と。其。翌。日。の。

亭午少し過る。比船の難波小泊。乗合の衆客と共に。船宿小入んと
 す。小那老僧在下と旁小招き。俺のこれより船と乗替。土佐國へ下。就て
 和主と相する。忠信。節操あり。然れども。今までの。親族の與。小辛。勞
 しく。志と得。ざ。り。る。べ。自。今。以。後。の。好。き。主。と。得。て。名。と。奉。家。を。起。さ。べ。き。と
 と。枕。の。ま。霎。時。の。風。雲。あり。ん。且。亦。火。急。小。災。厄。あり。て。終。身。の。哭。喪。あり。是
 前因の縁。所。甚。麼。とも。為。術。は。さ。ら。あ。り。あ。ら。う。所。親。の。人。小。必。一。度
 遇。こ。と。あ。ら。ん。开。後。の。意。外。小。心。勞。も。少。ら。ず。侶。ひ。と。る。女。人。も。和。主。と。道。を。ぬ
 宿。縁。あり。這。等。の。事。の。後。小。必。思。ひ。當。る。事。あり。と。先。快。道。き。所。縁。の。方。へ
 其。婦。人。を。侶。ひ。て。明。日。の。詰。て。赴。く。べ。好。せ。よ。と。道。棄。て。飄。然。と。と。港。口。の。方。へ
 ま。く。する。と。在。下。の。急。忙。く。推。扯。め。聖。僧。の。示。教。謹。て。承。り。ひ。ひ。ね。言。食。身。上。小。的。中。し
 向。來。も。必。然。ら。ん。と。辱。く。ひ。つ。け。て。只。一。飯。の。齋。食。と。進。ら。せ。ら。る。べ。

まげ 姑且杖を駐めて尚御教諭を希ふ而已且つ你の何方に住職しむ大徳にて
 法諱の甚麼と稟せやらん願ふ示しありと謹で演々言ふ那僧の立駐り否
 とよ葷肉を喫ふ俗男俗女小交りて佛餉を受んやうらむ煩累も無
 益沙門の本末無東西何處に投て屋處ありき和主が主君と憑ひき人
 舊縁なきゆめありと今更告て甚麼ゆせん只忠精ぶ忘情ごん後小
 再遍會ことありんと袖を拂うて悠然と眷顧もせび去き去ら

と一首の歌を吟じつ渚の方へ下り去く晒々落々風骨小再び駐ん有繫
 小雲寺時開方と着送してイミとりびも有縁那船宿めて酒饌を設
 け乗相の男女を厚く款待金百匹を支與へ助命の勞を謝せし大家
 大小歡喜舞々諷ひみ酔と盡して當夜の其處小宿るる信而人定り

その後在下熟惟るや那旅僧の凡庸なる甚麼ある人少有る既住と指
 する一言小未然もきざと查せらぬ火急小火厄出来して終身の哭喪と見
 れしそも何事とあるやらん所親の人小遇んとひも誰が辨るる知ぐと
 るとバ明日詰且這里と出但所縁の方へ去けと示さるる故里へ回るる
 るる心き飲きりと帰去うとも那仇さるる親政の目今第一の難臣とてその奸
 黨充滿と訴るとも辨成るる然有とて私小較果んも那の所後多と
 単身とて本意と遂げに偕て日數と経るる忽小搜索され狗死するも至る
 べ除非それと厭ひと恩義ある養父蜂六と連累せん不孝あり左やせん
 右や做すと思ふ小属て想ひ出る河内の所生の父母と訪ふ這首より最
 適り忠義の與小思ひ棄て眷顧もせぬ親るるとも邁去ともいなる先
 快那里へ訪去て便宜小因て進退と定めん伊勢と豫て立退て養父繼母の素

意は如く。二郎と世嗣小立んる。原是希ふ所なき。又國司の命與ふも。一臂の
 功を奏せし。思ひたれども。是も亦。出役の途ゆて。既小命を殞せし。一遍死する
 一般も。後小親政が罪惡と。顯露し。訴へて。勸解せらる。全く不忠とも。做べからず。
 と念ひ決り。うろたへ。垣衣を悄悄地小招きて。這首小初て。飛中の艱難と訪も。
 訪も。幼少の時より。迭小認め。間も。父守延の庭訓正しく。五柳村小
 退きて。親く對面する事。未見の人小會さず。如く。互小言寡きもの
 くら。父の横難母の災厄。苦々小向慰めて。さて在下が胃中と。箇様々と詳く
 話す。かゝる情由を有る。一旦河内へ信じて。実の父母小對面し。其うへあく
 相摸小まれ。伊勢小まれ。送着て。所縁の方へ届くべし。といふ。垣衣異議小及た
 ば。妻の婦女のゆゑ。いふ思ふも。只独。遙るき。逆縁小去べき。いふ。好もろ
 とも。然るべき様小。料理いさるべし。如此るうへ。何處の人の手も。渡りて。甚麼ふ

らん。辛苦き目とも。看れべき。亡父の所縁ある。你不俱せし。と。泰らされ。猶這
 上も心強。さうふても。俺母親の。念も。做せらる。いふ。適来の憂。昔も。信と
 ど。さうして。何處と極處と。索ね。信あり。と。知も。せ。俺身も。共小。白浪の底の。漂
 屑と。成果と。這悲哀。いふ。ま。き。現江湖上の。憂。昔。いふ。妻。う。人。一箇小
 集寄する心地して。命活くも。信。と。又。潜然と。泣。沉。と。在下。酷く。諫。め。つ。
 悔て。回らぬ。諄言。千萬言も。要ら。ゆ。自。ら。念。勵。して。身。を。全。く。と。父母の。讐。と
 報。い。ん。と。思。は。れ。ど。ま。さ。う。と。も。志。願。折。せ。縦。計。志。も。強。敵。も。討。果。さ。で
 や。措。く。べき。不。肖。な。れ。ども。在下。も。大。恩。稟。する。師。の。仇。共。侶。小。幫助。と。り。て。必。殺。せ
 稟。と。べ。し。といふ。聊。慰。ま。さ。る。面。色。と。着。て。心。を。安。ら。し。然。ども。若。き。男。女。二。箇。が。共。小
 走。ら。ぶ。李。下。の。冠。瓜。田。の。靴。の。誹。謗。免。れ。ず。原。来。先。師。の。恩。義。を。背。き。た。ら。ば。と
 て。又。在。下。ら。ず。誰。う。你。を。俱。し。と。い。去。ん。進。退。入。り。心。地。な。す。と。ど。那。嫂。の。弱。る。小

てとて
 手と以てといふはあはれ明日一日の推小處と在下俱して泰らるべし河内へ
 到らば父母の緯由を悄々告げて為術の幾個も有るといひて當夜の紙片を阻て
 那衆相の人社中へ在下の去て寝るは其の註目那衆人小早く別とて一個の老
 実多僕と央ひて。這里へ来る案内者として難波を出て泰るとして路を垣衣
 小情之のふやう。今世を忍ぶ你をば舊名を呼ん小心る死小似らう左も右も
 苟且小名を更らるてい。いつ小とや。とらふ小垣衣領きて妾もそこを思ひとて
 什麼とらうとも。念慮の隨小名着て喚べ。といふまは小在下漫小考へ
 信夫の陸奥の郡名を思慕といふ小題の好まば詠歌者流の詠
 て名高く做ぬとといふまは又那信夫のちと詠へ垣衣といふ草の葉を
 亂して衣小摺着うと伊勢物語の一説小ゆるるも所は垣衣を開伏訓
 換て加支々奴とせば什麼あらんとといふ垣衣會得て就て信夫を更めて這首

この泰とてい。這より以降の緯どもは已に知せらるる如し。思係ぬ父母小對
 面へこれども。緯齟齬ひて兩親共小不日刃小伏らる。諾旅僧の言小錯へ
 終身の哭喪さうらまはと不意実父の遺跡と續て姫久小傳き稟せ亡
 父母の遺訓小愜ひく。在下身小安き小似らう。恣に六件の老僧へ回せくも
 凡夫あらば佛菩薩の化現うとまと思はれてい。又那洋中の海賊と所見と
 高尾船の壯夫の甚麼さる者でいひ久。庶吉も如何さるえいと所まわく
 覺束は。借垣衣小ん身邊小召仕るべき小ん嬬嬢さふ。不自由の候さるまは
 幸やと泰らせらる小ん限めく御意小愜ひく。一日も盡て入宜らぬ小。今でい
 做てい。垣衣小心下の憂苦い。とと查し。在下とも無て得在ぬ。目今
 の身ともこれ稟出入有繫。一日二日と猶豫ひ。今日まで稟上さるる人
 借箇と知。食まは。姫久も亡父母も。人の女兒と扱と走らるるさるえと。



一とて心もまろすれ北へまみ
 警覺次老僧着海路
 けしきもぬせよたてしめり

のり新き 尚や思食まんと影護く想ひし果してさう押推量ありし面目もは絆まそ
 比又稻城大人は説きし絆も垣衣の所まう知れども當下小す固辞しつら
 絆と今更復せんや此是稟上べきさうのみど那人の鴻恩は一方さる縁故と願
 人與ぶるへ徳まふ少く間暇あらば垣衣女は藤沢へ送る去て野上氏小邊
 典きびと在下信義も立難くほど奸賊們的間々時々隙と窺ふ目今
 片時もお側と立離るべき小非は垣衣女も徳と稟所せひし去方
 定めぬ躬一箇お姫への御慈愛と蒙りて未甚度ぶりの御奉公もせひ今
 藤沢へ去まともは假令那里へ到りとも猛可小所要あり身さるるは尚何時
 まども姫への奉仕で大恩の一端とも報いさうんと稟まふ小心安堵つて過ひひ
 ぬと首より尾まで漏る脱は述べ姑摩姫倍感歎し現様々の人身と
 所へ念へば聚散離合喜怒哀樂の迭代は江湖上の光景と不定なりとて

いふ情由の知されば你二人と夫婦と念ひし絆はさうさうとて前
 世の宿縁ありと那老僧の道まうさう後未必まざる所由ありと奴家
 想ふ言あはれと開け今議まき絆は非は原末危殆き船中の賊難と辛うして
 脱まらる希有なりと忠魂義胆貞操孝烈兼備へ你們も神明佛
 陀も見放ちるるぞ向來愛う栄へし然れども垣衣の母小房と便らうん
 心中さうと查しこれ見も亦天の命へ蓋命運盡せぬ再會は其期さう
 らん嘆く時に至ると等然らぬと藤澤へ去べき人と情あり奴家が故小
 耻めらるる無情なる絆され復さるるもさうべき人俱して送るは易かると今
 要時這里に在り時と等らば悦喜の必あらんと思ふ所由ありさうが故人小邊近て
 幫助を得るる多うるべし急忙に要さるるべし就て件の旅僧は甚麼さ
 る人の果さるる最ま心愛き人なる歌の意と以て案さう南朝小忠志深る人

の容と変るる少の精多きと然とてさう賢き人の公家も武家もさうの所
えは公家も万里路中納言藤房卿武家も兒島備後三郎高德とこそ文
學和漢の有識と所し終り所慥らむと備ふる人々の然然と
高德の武士と有るは後小出家の事どもいふ甲斐なく顔折て雲水小
迹と断へうとさう吉野の先帝と諫難て身退きて藤房卿もあは
へきとありさう那卿の出家道世せしむるは建武元年の年と
より八十年余前の事とさう百歳も餘るべし世に在るの覚束るれど
道德兼備すまは長生せらるるも非ど是も亦後小至りて思識る
有るべし又高尾卿の丈夫の東西と掠むる海賊或は英虞將曹の難多と
救んと未だる人致考ふべき所由の無きと威風と示して漕寄とるは那親政が
阿黨と決めて仇讐の入るるべし那這戦争ひとるふと有る依る業小庶

士只何せやして一命と断るまで入らざらば是亦這世小活命て天縁盡
ぶの會期有べし酷く莫物と想いと道が安次垣衣も俱小然と感歎と開
明断と稱しと長話説小夜も更て前裁小措く霜色も皎き倍と所看と
る小葛城山の夜半風小吹る燈火盡んとて一番雞の聲するは丑三も稍
過さるべし安次佐と頼と更め噫俺さう怠慢さうき這癖者と乳も白で机
密多う話説と犯あし最過失さうき乞や這奴が今宵の顛末白状とせんと
庭へ飛下と網の索拿詰てやと盗入らん眼前とて一事も漏さる稟上へし偽
らば今立刻小斬て棄んと奈何とと烈しく詢問したるなり

第四十八回

義小感とて騙賊昨非と知る
計と授けく勇婦偷兒と免と
件の賊ハ神草比奇特小憑と被さるる手痺の痛苦も忘さるる頭と低て

衆人の忠魂義胆の長話説と首より尾まで熟聴て酔るが像く黙々と居
 うしう安次小噴向と頭と拾げて吐息を衝き連小歎息と道より比類
 少る你們の艱苦小怯まぬ豪俠義烈揃ひも揃ひ英傑のちん話説と料らど
 る承て三十八年造り罪辜の天忌と徐く慮識と始めて夢の醒る
 像く最愧羞く堪難と快々首と刎らるべし。さても今宵這里小承り
 萍の由と知食どわん大事小るるもあらむ且小可が身上の懺悔話と首に
 てちん災難の繋るべき仔細と稟て誅せし人是併你們の忠孝挽ぬ御心感
 して只半駒も善心小立復て報恩と長長と所し召せ抑小的も祖
 ありの騙局盜賊もいら陸奥國信夫郡平田の里小葉四郎とまうと莊
 客の子小荷二郎と喚做は者て父の農業の間隙の牧師とまうと
 悪馬と自在小飼とて新田少將義隆朝臣陸奥の國司小任とて下向

ちん最初も馬の鑣取小召出さして身近く役のせらひたり。さても葉
 四郎ハ只管主君小後ひもを。這處那處の戦争も。ちん跟随せとのまう
 家ありとて。回來後。小的の郷里に在て母親一名小育らるる。打懲さるる人も無
 ちん成長す小隨ひて。懶惰放埒母親と説破り。悪き遊技ハ一箇とて。記憶と
 ちんも。年紀十二三の比より。酒も嗜む。女と挑む。従はるる強姦。賭博小
 ちん耽り。六口悪党小交會ひて晝と夜と。家あり。近里比隣の憎
 ちんめ。他人の訥訟止駒も。母親のれと。苦小病久小的。十四の春。竟
 ちん黄泉の客と做ら。當下小的も。有懸小悲。形容とる。葬礼
 ちんを當り。五日十日ハ頭痛とて。外へ出で在る。咽喉過熱と忘る。譬
 ちん喻小漏れ。悪棍疑許小再哄誘され。激勵さして。就て四邊と徘徊。誰小憚る者
 ちんも無。悪行日々小増長せ。村長も持餘。父親。這由報と奉仕の暇

基きとて。叮々如き艱難と受むひる勅さよ。你的父君館大人。少將さるの御
 近衆の首長であらせし。小的が父親葉四郎も。お部下下居属らまで。平素小森
 りくおん恩類と蒙りぬ。お所知おきさる人々の女児御とも。知て拐一糸らせらる。遺
 憾へ今更悔へ回らむ。思まきお斬罪さる。寛念と晴きあべし。この小的才毛
 山まで箱城わし捕稠らむ。搦めらむん。折不慮甚藤小脚と捉まて。千仞の
 谷へ轉墮し。小幸少と懸て。其後の事へ怠々。固様々おひききて。東海
 道まで長途と。小夜二郎と。騙局小繫て。盤費と奪ひ。ゆりゆりして。四老村の鈍梅
 藤松が事。お畠根川の獄舎と踰て。長途と助け。ゆりゆり。這河内未まで。
 五十日程電次者克小做。ゆりゆり。又那夜稠の混雜小乗。と。捕家の重宝と偷し。
 りゆり。隆光と訴へて。却て長途小訴られ。首と刎らる。ゆりゆり。就盛小放免せ。ゆりゆり。遊
 佐の城小在。ゆりゆり。一五十一と詳く説て。那長途へ。ゆりゆり。底倉おて。撃手ゆりゆり。

藤白隼人安同が妻あり。由とも知どて。假ゆも妻よ夫と。喚び下。緋の羞しき
 よ。ききと。那奴既小意心と。小的と訪へる。冤恨ある。豪衰と。免償小
 通じ。情景さる。近日小慮知せん。計りゆりゆり。那奴ゆて死んゆり。
 有撃小遺恨ゆりゆり。开将未練の諄言さる。今小直京さる。その甲斐ゆし。
 只等剛小做。ゆりゆり。木造恭勝が緋。未知。食ま。や。那恭勝ハ伊勢と追ま
 て。今亦阪の館さる。持永主小昵近と。現在那里ゆりゆり。と。ゆりゆり。駭く。垣衣安次
 そ亦甚麼と。訪り問へ。荷二郎ハ恭勝が父親政。ゆりゆり。俊雅と。憑き。密小
 花浴へ上せ。ゆりゆり。おま。満家が料理と。偽使の與。恭勝と。乞て。這莊院へ
 差。ゆりゆり。持永姑摩姫小繫。想と。齊天行者が幻術と頼。畧奪んと。ゆりゆり。
 山探の荒出。ゆりゆり。その計の徒。ゆりゆり。事と。ゆりゆり。詳明小。悄き。生口。と。往。元
 目。恭勝遊佐へ使。去て。就盛主小。小的と。乞ひ。携回。と。持永主。前科と。勸解

所従う。常小那身小隨へて仇と防久事と課せ。且長途が虚実を探りて小的が
 鬱會をも散させん。と道小依て小的大小便宜を得て稟せしむ。許諾しつ。
 那達の小六さるハ父親が主君の令郎と絶て知後が這頭へ来る。闇討しと
 恭勝が憂と井人と約しつ。信る小嚮小恭勝が小的と携て回り路之伊勢
 小使役の草履奴敵介と喚做さる。今ハ不九郎と名と換て非人と做さ
 る。小撞見し。开夜小的と差して。件の敵介小金と與へ身と装はせて入稠
 せ同く駐めて隸ひつ。さて或日恭勝ハ敵介と小的小酒と吃せ。情々地小譚ふ
 や。今番館の令郎ハ箇様々小謀ありて。姑摩姫を得んとせられし。小
 又姑摩姫小裏と透して。齟齬ひつるの事も。正直の女君子と以て換玉小
 為さる。即君大憤らる。遊佐主様々小是と勸解て再謀らる。首の
 る小依。件の事の差錯ハ秘て入る漏さる。和即ハ情々小听せ。必々他小

漏れを俺も目臈正直の庭の山々千里鏡にて八九の莊院と覗看。時男小箇の美
 人と看らる。伊勢と畧奪せらる。稻城の信太最能肖らる。さる故小郎君の御
 替礼整ひつ。稟請んと約し措く。遺憾といふを听て。敵介の不九郎ハ
 駭きて。原来信夫と看らる。小可も嚮日小如意宝珠院の門外で。信夫が
 上墳の代泰小去らる。惜小看らる。といふ泰勝評ア。什麼と。开信夫
 正可小那處小在んと思も。驚いし。他ハ俺と父の仇と。狙撃んと
 由る。前番父よ告て。他が東小去んとする。船中小人を伏て。蒙汗薬と
 吞せ。結果あつ。父親ハ許諾し。開後俺ハ花洛と出て。這
 處へ下と。あつ。父親とハ表向絶交あり。便りして。おん回答ハ未慥小
 听後。那謀行ら。這世小信夫が在ん。見錯へ。三十日の別莊小在り
 不九郎頭と掉て。伊勢と他と奪ひ折も。三十日の別莊小在り

頃も面を包きて着せざうへに他小可と知れども小可も他と着錯まぐもは。那上墳の回路小可鈔と乞へる。伴當の男が拿出て所未んとしつる小可。財布の紐の腋刀孔柄小纏まらると。解とて躊躇する間他の開頭小可。左の耳は黒子まで脱あき認得ていと道が泰勝大駭き然やとそ又這國へ。怎やと来やらん。最精ききりあまの尚克真偽と着決るとそその日他譚小移り。昨日泰勝着急と小可と喚て悄語やう。明後日即君河備の館へ督入むとて出立り。其後乗のふ伴當の豫て俺們小分付られう。焦れども那信夫。這頭小居由断あらむ。依て屢推辞しども。即君一切允さむ。當惑這首小逼やう。就て和即小憑むりあり。升の男の辨むあらむ。和即の簷を飛壁と走る。竊偷の術の得やうとつる。替からも人小起とまぐらふ。つる。八九の莊院小竊ひ入て。那信夫とちがき女を

搔攫ひて得せよう。さうに俺の面と着て寔小信夫小非やせ。口説落して妻もまぐ。倘又信夫小決らば。殺して患の根と断べし。萬一箇も悔ひ難ら。那女の出所来歴具小知て回へし。那姑摩姫の武勇剽姚丈夫は捷や。その上小隅屋某甲と喚做する。若覚あつて是亦萬夫不當の本事あり。と听ては虚々馬小乗て。明後日の伴當小立ぐ。和即も其頭小小心と。只顧這美を憑むと。小可的推辞難て成る否。知れども。然這小のまぐらふ。ハ一挿と驗むべし。任他那姑摩姫の神小通せ。術のまへ。怒小竊入て。首と失ふ。そのやあらん。況や東西と奪ふも非ど。活る人と畧する。其難き業も。褒美の奈何と期と推て泰勝小會得せ。就て昨夜も這外小泰と。那這と現ひ。内外の小心御堅固も。隙と得て。徒く回り。尚又今宵も又聞を。幸やと紛入。宵より躲とて窺ひ。垣衣との厠小去と。独外面へ出ると

と知る人もあらず。狗死せし不類せん。汝も忠孝の名聞ふするゆゑのあつらひと。
 武士の家名を惜みて祖先の恥を顧みず。惣来皇朝の風俗あるが。死の
 忙しき要らざる。この誼は奴家不任せて措かざる。遺言を
 ひ凡個も有ん登時復一も恩義の與不助太刀して。那這共小両全の美名と天
 下小揚とて。渡莫眼前の仇敵小威勢あるがと。看つ遁して月日と過
 さん。俺身を擣て胸中の憂苦さごとと直く。奴家も曩小仙媛の遺教
 不背きざりて。單身ふて義持と撃まじし。錯誤あり。維盈夫婦を徒小刃
 伏しあつ折へ千悔开首不及び。殆臍を啗らる。さよ前車の覆り。蹤
 へ遺るも有ぬ物。你も後車の誠と。要時忍びてあらねと。説諭を樹衣に
 始て夢の醒る像。數回額突つ。諾神々しき姫人の。おん明弁の蠢馬なる。
 妾が耳も最克入て。却教誨の旨一々小肝小銘とてさし。仰小従ひ時と

まち。尋常小名告係け。勝負と天小任せ侍らん。冤家の在所と所へ。伏ふ
 不覚小端と侍らん。甚どき誤り。一言稟つ。歡喜。姑摩姫のち領
 荷二郎を眷顧て。荷二郎とやら。人慥小所け。和郎が倣る。年来の悪事の
 次第ハ神明佛陀も。免らぬ所あるが。只今首を刎べき。幸ふして
 垣衣を傷も。又衆快の信義と听て。心と更めらる。今夜より一個の
 善人として云べき。然るが今番の料を免して。命を助け。差とべし。目今
 言一。一念と。翻さびて。後々の人と。幫助と功と。樹今まで。作一悪行と。補さ
 のあつらひ。天地の神明和郎が身と。必罰あるが。意得らる。と告知して。
 復一。开奴が索と。解て。快後門より。逐出ぬ。といふ。安次眉を。擧め。仰みて。い
 ども。這奴の。几通う。人を騙。或は殺。かどと。大畧。机変小長。今一命と。助ら
 んと。前非と。悔らる。面色。放。復。悪念と。誅起。と。きも。料。と。ト。



世三

五十五



荷二即悔非歸
 赤坂
 ちつや杖のつゆ丸めは

女家傳第五輯卷四

五十五

且衆人の机密とて入所識ていへば持永恭勝們と商議して甚麼様の災と
隠出さんも知べしと只快他が望み任せて誅戮いひややとのべ姑摩姫微笑
て你の遠慮のさるるあつ。他衆人の忠孝も感て自ら開非と知て今宵
よりして善心ふ立回りしうとひらめき。除非開言詐偽さうともこれと殺て
ハ善人を傷ふ。又人と殺と者ハ必殺して免さるハ古今変らぬ法曹されど
嚮小他小殺さうとらん。煙貪不負開身と逼て天誅及ぶべき者共さるべ
訴へど殺さうも姑く免さるべし。諸亦衆人の行状と白地小聞知
とらん。絆の不便お似れども。約莫英雄豪傑ハ隠さるるを行なひ其事青史
小載らして千載の下傳とも。美譚と做るべき節操と立る天地小糾して
羞さうとほ。即今所し野上著演達助則英直夫妻。維盈夫婦。你
二名ハも更之守延の忠目即が。楯取庶士口小至さうと。怎と志士の所

為らうとせん。されば開絆室町家へ所えうとも異らぬ。抑民の父母とて
ハ善と揚。悪と懲。縦計怨敵さうとも。開忠信と賞とこそ。國家治
里果べき。義持心窄とて。南朝旧臣の裔とて。根と絶葉とも枯さんとさる
ハ寔小薄情きりゆとも。さま。新田楠木の餘流と知バ。害心ありとも。い難
られど。是亦天あり。時運あり。君御聖運。幸々。開方さぬの人々の性命も全
う。尚又御聖運傾く。誰と侶わ。活命て。仇讐と共。白日と見ん。助
則も同志さう。又持永恭勝們ハ斗屑の小人們。さま。怎様も謀るとも。大
尺の知てる絆ともあり。機小臨ミ。憂小應と。這首ゆも小心とさるべし。但垣衣
ハ荷二郎小。旧怨もあつ。なれば殺まくも思ふべし。今又寛家の在所と報さる。
寸功ありとも。いへば。放ち遣ん。飲甚麼と。と。研て垣衣。怎と背うん。
宜さう。小荷二郎ハ妾と拐さる者。かれとさうと。殺さるふも非と。今の

誠實の自然と現る。姑摩姫所て感嘆。通微妙き和主が覚悟。今宵
 ようして善思小立も回す。羞惡の端感さる余餘あり。現悪小強き者。善
 小亦強くと云俗の諺も和郎が身小。今宵首めて着るつと得る。然らば和
 郎小託はべき一件の机密あり。這方へ倚ねと喚途着て目今死る命と存在
 へ罪と贖ふのありと克為べきと問撃まは。荷二郎思ひはうち咲て死との急
 小ひちちと唯道理の差急促て自殺せんとし。尚存命ておん與ふ。骨と碎る。骨と刻まは。辞まは。不覚小勇ひ聲高やふ意氣
 憤然とて。姑摩姫の憶莫喧と推禁めて聲と悄め和郎が心底を有らん。
 那歇店の目四郎が野上史の高義小感。害心と更めて藤白隼人と撃する。擬
 ぶとふ非強ども。那泰勝持永が庇陰小倚る大敵あま。垣衣一個が力あ。即今撃
 るべくもあらぬと和郎幸小立回す。幫助て仇と撃し。主君おも亦官長も。

恩を報する一端多。開計策の恣々。箇様々と事詳悉小。聶き示は。荷二
 郎の耳と傾け感心して仰承りひひぬ。現も美どきおん料理。さう暇と賜りて。
 赤阪の宿所へ回す。但這戻回す。他小的と猜ん。狄希の恣々。東西小。竊
 入る証と做すべき。東西一箇借多。といふ。姑摩姫領きて。開頭の用意決めて
 佳し。垣衣と顧て。你的衣服と一個出ぬ。と分付て荷二郎小遞与を。這小
 袖と以て恣々道。恭勝必猜下。又豪衰と。悪僧の聊の幻術あり。甚麼
 とも前知する由あれ。開奴小知。おれ様と。郷小垣衣が水小浸る。神
 草と乾と。机上小措ると。拿て。この神仙の賜ひ。人間小。雷早あれど。
 姑且和郎小貸措べ。這草と身小属。豪衰と。術あり。和郎が
 意衷と知る。能。目今痛癢の頓小痊。全這草の功驗。鹿
 鹿小思ふ。と説諭と與れば。荷二郎小雀躍。酷く歡喜。護持

裏を解開きて件の神草と受収め。さうぶとむろり身と起し。三拜し。那小袖と。
閑しと肩小打懸て。後門の方へ出去べ。ゆゑ頻る雞の聲。小紫もあくる横雲
の色も東の空ふ所着て。奴隸が咳く。庖福の後と。那誰時の薄闇き。霧小紛として
回す。

作者ニ此回の次小北畠俊雅河内へ未で。再遍姑摩姫の婚姻を復せ
事。又荷二郎が赤阪へ回す所の為。垣衣が復讐の事。豪衰長總們が顛
末と。著せむと思ひ。うども。然而の小六が出現を話する。小聊妙なる所あり。小六
赤阪の一條の姑且後集へ譲す。次回より。専小六が争小及べ。看官請事
の正定せぬと思ひ。後集の發兌を等べし。



開卷驚奇俠客傳第五集卷之四 終

